

## クレマン・マロ「第2エピグラム集」の アンヌとアンヌ・ダランソン

村 田 八 束

(1996年1月24日受理)

LXXIX

A Anne

Anne, ma sœur, sur ces miens Epigrammes  
Jecte tes yeux, doucement regardans,  
Et en lisant si d'amour ne t'enflames,  
A tout le moins ne mesprise les flammes  
Qui pour t'amour luisent icy dedans.

アンヌへ

《アンヌ、吾妹子、この短詩集に  
眸を向けよ、優しく見つめ  
これを読み、恋愛に燃えずとも  
少なくとも、君を慕ひてこの中に煌めく炎、  
つれなづくりそ》

クレマン・マロ Clément Marot 作の、アンヌへ献呈の第2エピグラム集 Le Second Livre des Epigrammes dédié à Anne は当然 Anne に始まり Anne に終る。

詩篇数80個で n°80 が Anne 宛に無念の擱筆を告げている。詩人は第1集のエピグラム80個と数も揃えた筈であった。C. A. Mayer の言葉を借用すれば、これ《仏最初の Canzoniere の誕生である。》Pétrarque の Laure に習って Marot は Anne をこの俗事詩片 Rerum Vulgarium Fragmenta の主軸に据えた。

Anne も Laure と並んで不朽化されんとしている。

しかしこの軸は Laure や Délie の一貫性も安定性も持つに至らぬ。Anne 詩は散在し点在するからだ。哀歌 *élégies* に幾許のプロットが読めるに反し *épigrammes* は勝手に飛廻る鳥である。順番も筋も取り難い *Poèmes de circonstance*, 時宜に応じ *lyrique* であり *satirique* であり宮廷恋愛 *amour courtois* に平然と野放図な *gauloiserie* の哄笑も入り交じる。一筋縄で行く男でなかった。だが詩人の想い Anne に戻る時、彼は常に *pétrarquiser* (ペトラルカ風の歌調で唄って) してエピグラムの甘味を増した。これはルネッサンスを席捲した *pétrarquisme* の本格的仏到来である。

先哲を参照しつつ、Anne 詩の当否、内容を中心にこの *Conzoniere* を検討する。それは五百年前のフランスの感情を真偽とりまぜながらも、直截に我々に届けて呉れるもので

あるから。

暫くは見捨てられて、今世紀復権著しい《王の詩人 Poète de Roi》の一面を伝えるものであるから。

なお本稿使用の Marot の詩は註記しない限り éd. Mayer の N° による。Eigramme は Epig. と略記する。



### 恋人たち

恋歌 Poésies amoureuses は Marot 詩中にかなりの比重を占め、秀歌も多数だが、時に単なる讃辞 compliment であり世辞 flatterie であり、束の間の、時宜応変の Poésies de circonstance の性格も色濃い。もともと宮廷恋愛は架空の棧であって美德を憧憬の彼方に称えても仲々現実の相手所有にはならなかった。宮廷詩人の恋の相手も、それに何よりも先ず読者が気短な宮人達なのであった。恋の真摯は計り難い。

それでも後代の研究家達は詩人の恋の対象として、詩面に浮ぶ佳人達の中から3名の女性を抽出した。Ysabeau, Diane, Anne である。各々、一、二首の献呈詩しかない他に比べ、この3名にはグループ化するだけの詩数も特色もある。これら詩群に彼女らのと云うより、Marot 詩の個性見易いであろう。

Anne 宛の詩検討の前に先の二人についても少し述べておく。

#### Ysabeau :

この詩群は、Epig. 4 個と Rondeau LXIII 《イザボの移気, De l'inconstance de Ysabeau》と Ballade XIV 《恋人だった女ヒトに駁 Contre Celle qui fut s' Amye》であり、恋歌ではなく、諷刺詩 Satire に属する。

いずれの詩に於ても詩人は女性の不実を語り Ysabeau の方は、峻厳な肉断ち日 (carême 四旬節) 中の、詩人の破戒を咎めて復讐にでる。《彼を逮捕して! 脂肉を喰べたのよ。Prenez le, il a mangé le Lard!》が、この有名な Clément 告発の Ballade XIV の Refrain である。詩人は復讐鬼を鮮やかな詩の網に捕えて北叟笑んだが投獄の方は事実であった。

人々は当然この女性の真実在, authenticité, 身元確認, identifier, に奔走するが遂に不詳。まさか Epig. 73 にその姫宮 Princesse ぶりを称えられるナヴァール王妹, Isabeau de Navarre が端たなの詩人告発の由も無かった。

現代は Ysabeau を実在より架空名, 詩人創作の不実悪意の Symbole と取りたがっている。話も旨く出来過ぎた。全くこの喰えない詩人は、人には何を喰わせるか知れたものでなかった。

但し、この御宗旨違反は高くついた。辛辣な旧教攻撃のペンの故に、むしろその方が重要なのだが Sorbonne 側はこの投獄を境に、彼の生涯に何時迄も暗影を投げる異端のマークを付けたのである。怖るべき異端糾問、幕開けの時代であった。

詩人の方は存外軽く考えた節がある。心強い友人 Lyon Jamet の介入による3ヶ月後の釈放が知られている。

Rondeau LXIV. Rondeau parfait

《今や、自由に私は出歩いている。

牢につながれてはいたけどね。》

(Couplet 1. vv. 1-2.)

そしてこの出獄直後 Marot は Anne に会い、釈放の喜びに恋の喜びが加わった。Ysabeau 不在説結構である。もう Marot は不実の Ysabeau を歌わなかったから。ただ、ここに一詩 Epig. 60, Ysabeau 宛, Anne との比較がある。不詳即ち不在にはつながらぬ。それにこの詩は詩人が Pétrarque の弟子たるを宣言していて重要である。

LX

A Ysabeau<sup>2</sup>

Quand j'escriroys que je t'ay bien aymée,  
Et que tu m'as sur tous aultres aymé,  
Tu n'en seroys femme desestimée,  
Tant peu me sens homme desestimé.  
Petrarque a bien sa maistresse nommée  
Sans amoindrir sa bonne renommée.  
Donc, si je suis son Disciple estimé,  
Craindre ne fault que tu en soys blasmée.  
D'Anne j'escry, plus noble & mieulx famée,  
Sans que son Loz en soit point deprimé.

イザボへ

《私が君を大変愛していると書き、

君がみんなより私を愛した時

そのため君は軽蔑される女性に成りはしなかったでしょう

こちら、ちっとも軽く見られる男などとは感じなかった。

ペトラルカはちゃんと恋人の名を挙げて

名声を損じはしなかったさ。

小生が立派な彼の弟子であるからは

そのため君が非難されると案ずる必要はない。

私はアンヌについても書いたよ、君より高貴、良い評判、

彼女の称讃それで減らさず。》

Diane :

Epig. 56, 57, 61, 63, 102 に Diane の名がある。いずれも恋人 Diane の美性に、月神 Diane に由来する神性、神話を重ねた詠み口である。例えば Diane と太陽神 Phebus との対置、月神の《死の接吻》、Diane と Cupide の弓の交換 etc. 更に Epig. 70, 71, 86, 91, 106, 117 は Diane の呼称こそ詩中に無いが各々の理由で Diane 宛に擬されている。

例えば Epig. 70 の冒頭句《新しき炎、胸に燃ゆ・Je sens en moy une flamme nouvelle.》は新たな恋人の出現を意味し、それならこれは1527年来の恋人 Anne ではなく Diane だ、と言うのが Diane 説をとる G. Defaux の主論旨である。他の詩 Genre 中の女神 Diane は別にして、意中の Dame としての Diane の登場は、即ちここに挙げた11個のエピグラムはいずれも、1538年3月の Chantilly 写本と同年7月の Dolet 版の作品集、Les Œuvres に初出である。従ってこの女性と詩人の遭遇乃至詩発想は少なくとも追放解除で仏帰還叶った1537年以降と考えられる訣である。

Lenglet-Dufresnoy はこの新しい詩人の相手を Diane de Poitier と考えたが、彼女なら当時既に王太子 Henri の意中の女であり、父王 François 1<sup>er</sup> の寵姫 Anne de Pisseleu と権勢を競っていた。輿入れしたばかりの太子正妃 Cathorine de Médices すら顔色無い。

CII

*A la bouche de Dyane*<sup>1</sup>

Bouche de coral precieux,  
 Qui à baiser semblez semondre ;  
 Bouche qui d'ung cueur gracieux  
 Savez tant bien dire & respondre ;  
 Respondez moy : doibt mon cueur fondre  
 Devant vous comme au feu la cire ?  
 Voulez vous bien celluy occire  
 Qui craint vous estre déplaisant ?  
 Ha, bouche que tant je desire,  
 Dictes nenny en me baisant.

ディアースの唇  
 《尊い珊瑚の唇よ、  
 接吻を誘うかの；  
 雅びにも語り、答える唇よ、  
 答え給え  
 火の前の蠟の如く  
 汝が前に我心溶去るべきや？  
 汝が意に染まぬを怖れる男を  
 殺したく思われるや？  
 ああ、かくも望みの唇よ  
 我に接吻けて、否と云わまし。》

如何に Marot でもこんな恋歌を De Poitier には贈れまい。ましてや亡命先のイタリアでの後半は這々の呈、追放解除令を握り締めたのは昨日だろう。こんな希みはそれこそ《月神の死の接吻》に成り兼ねぬ。

Guiffrey はそれならこの詩は王太子の代筆と述べている。Marot が貴族や女官に成り代って唄った例は幾つかある。Epig. LXXXIII《仏王太子フランソワへ A François Dauphin de France》は一種就職願いの鮮やかな自薦詩で《何事にも我手練のペンを使い給え》と述べている。しかしこの王子亡き後を継いだ王太子、後の Henri II世が Diane de Poitier の為、そんなに度々詩人のペンを借用したのか、又詩中の Diane がノルマンディ長官夫人 la grande Seneschalle, Diane de Poitier であるのか、結局一切不詳である。唯、詩面に Diane とあるばかりだ。

ついでながら確実に Diane de Poitier 宛の一詩が残っている。1540年から41年にかけて製作の年頭献詩 Etrennes 中 N° XI がそれである。

CXLIV

Etrenne XI

*A Madame la grand'Seneschale<sup>2</sup>*

Que voulez, Diane bonne,  
Que vous donne ?  
Vous n'eustes, comme j'entens,  
Jamais tant d'heur au printemps  
Qu'en Autonne.<sup>3</sup>

大長官妃殿下へ

《何をお希みでしょう、良きディアージュよ  
何をあなたに差し上げましょう？  
聞えますところ、あなたも春には  
これ程のお仕合せはお持ちでなかった  
秋程の。》

当事者なり宮廷内部なら直ちに理解されたのだろうが、暗示が曖昧過ぎてこれだけの詩句数からは良く内容が読みとれぬ。G. Defaux の註記によると、Diane は1531年に未亡人となり1536年頃からは公然たる王太子の情人であった。春と秋の比較はそれを云うのか？ 或いは1536年なら Diane 37才、人生の秋に於て恩寵を得た事への暗示か？ とある。しかし、年令についての発言なら少々不躰に過ぎようし、作詩が1540年ならこの祝福は遅れ過ぎていよう。ただ詠み口は随分控目で先述の N° 102、接吻要求の詩と対象が同じとは考え難い。

結局 Marot 詩中の Diane の実像も不明のまま Diane mysterieuse として止まっている。

Anne :

1875年、George Guiffrey は既に《Anne は虚名ではない》と確信していた。Etienne Dolet のラテン詩が彼の論拠である。Dolet と Marot の親交は1537年2月の Dolet 出獄以降1ヶ年余の短期間に過ぎない。丁度その頃、はや Marot への好意冷めたかの Anne

に業を煮やしこの狷介なラテン学者は僚友の為、Anne へ一詩を宛てた。

《Anna よ、Marot はあなたに栄光を与えて呉れます。彼はあなたの名を雲の高みに、遠い後世の果迄も運ぶでしょう。友人達も彼に唱和するでしょう。これ以上あなたは何をお希みです。私、かの名高き Dolet もあなたの名の不朽化を始めています。》

やれやれ、Dolet の約束にも拘らず目下 Marot の意中の Dame の姓名は我々の所迄届かず、と Guiffrey は嘆くのだが、ここでは Dolet の論旨の方に注目しよう。

もう一首、Dolet がネオ・ラテン詩人 Borbonius こと Nicolas Bourbon の恋人 Rubella を諷めるエピグラムに於ても Anne は論難俎上にある。

《天与の才、衆に抜きん出た男達に愛された女性の仕合せなこと、真に、地上の権力は王でさえ何を与え得るのか？ やがて消失する富なぞつまらぬ贈物さ、詩人だけが栄光を、すべてに優る栄光を与え得る。結論：不朽不滅を与えて呉れる詩人達を愛すること、これ恰も神々から愛される如しだ。あなた達は神々から愛されている。おお Anna よ、Rubella よ、あなた方は詩人達を愛するすべを知らないらしい。》

この論旨、口調、時折 Marot が牙を剥くと全く同一の思想である。王侯貴顕、貴夫人方何するものぞ、とは云え赤手空拳の詩人達にこれ以上の対抗手段は無かったろう。即ち《不朽の分配》である。これは本来、神の仕事であるから、かくて詩人は王に対し、手の届かぬ Dames に対し、神の高みにつき得るのであった。

この誇りは Ronsard に代表される次代に受け継がれて行くであろう。

さて、この Anne は実在した。1913年、Abel Lefranc の Epig. CCVIII 解読による立証は夙に有名である。この8行詩、Huictain には Anne の姓名と、髪毛の色迄、朗らかに詠み込まれていた。かくて Anne d'Alençon が特定出来れば幾つかの詩は、自動的に、確実に彼女に結びついた。

しかし詩面の Anne がすべて D'Alençon と云える程、事情単純でない。詩は事実だけを語りはしないし、如えて筆生により、諸版により Anne は現れたり消えたりする。時に詩作者の真贋すら問題になる厄介な variantes を碩学達は18世紀以来、追いつけ整理して来た。更に加えて Anne の名は無いが Anne 的な作品もかなりの数に達する。

Jean Déjean は Anne は遂には Référence と云い、Gerard Defaux は Anne 詩の削減に努めている。以下、主にエピグラム第2集中の Anne 詩の検討に移る。

エピグラム2集2首目は詩友 Saint Gelais との遣り取りだからとくに訳出しないが Marot への悪口と対する詩人の自負が話題であり、いずれ Sagon 一派との燻り、齒牙にもかけぬ自信はこの詩集を守るものであろう。3首目、Mayer の通し番号 LXXXI が次の独白である。

LXXXI

*A soy mesmes*

Si tu n'es pris, tu te pourroys bien prendre,  
Cuidant louer ceste Laure invincible.<sup>1</sup>  
Laisse tout là! que veulx tu entreprendre?  
Veulx tu monter ung roc inaccessible?

Son noble sang & sa grace indicible,  
Ceste douceur qui d'aymer sçait contraindre  
Et ses vertus que mort ne peult estaindre  
Sont du povoir de dieu si grands tesmoings  
Que tu ne peulx à sa louange attaindre,  
A son amour (helas) encores moins.

自分自身に

《打勝ち難いあのラウラを称えようと思えば  
お前は捕えられずとも、進んで捕われてしまうだろう。  
やめてしまえ！ 何をしようと云うのだ？  
近寄り難い岩山に登ろうと云うのか？  
高貴の血筋，云い難いあの優美  
恋せずにはおれぬあの優しさ  
死も消し去り得ぬあの徳性  
それらこそ神の御力の偉大な証拠であり  
お前の腕では彼女を称えきれぬし  
ああ，まして彼女の愛に到達の筈もなし。》

この詩の titre は幾つもの variantes がある。先ず Chantilly の ms. N° 748 が《Il parle a soy mesme》であり、Dolet 版には《A soy mesme de Anne》と Anne の名が出現する。Gryphius 版は単に《A soy mesmes》。Guiffrey 版は《A soy mesme, de ma dame Laure》を採用し Epig. N° CLI に整理している。

第2詩句 Laure invincible は何者か？ invincible は irrésistable, inbattable, 即ち抵抗不能の美しさで人を惹き寄せ、しかも現世的な恋情には決して譲らぬ不敗の Laure, これは Pétrarque の微風の Laure 以外ではあり得ない。しかし Laure を歌うのは Pétrarque の役目、我詩人は Pétrarque の思いに凝ったこの完璧の面影を自らの恋人に重ねているのである。

Defaux は例によって Epître XXII, 及び Canzonière N° 20 を援用しながら《これは Dyane》説。しかしエピグラム第2集 N° 3 にこの詩の定位置を決めるのなら、ここに Dyane は置きにくいであろう。詩集は誰し巻頭詩から始めはしないにしても。

LXXXV

*Estreines à Anne*<sup>1</sup>

Ce nouvel an pour Estreines vous donne  
Mon cueur blessé d'une nouvelle playe.  
Contrainct y suis; Amour ainsi l'ordonne,  
En qui ung cas bien contraire j'essave;  
Car ce Cueur là, c'est ma richesse vraye;  
Le demeurant n'est rien où je me fonde;

Et fault donner le meilleur bien que j'aye  
Si j'ay vouloir d'estre riche en ce monde.

アンヌへ年始めのおくりもの  
《この新年の進上品に  
新しい痛手に傷ついた私のハートを差上げましょう  
仕方がないのです。愛の神のアムールがそうしろと命じるのですから。  
反対ですとも 何しろこの心こそ  
私の真の財宝です  
残余の肉体なぞ頼むには足りません  
しかしこの世で豊かであろうと思えば  
最良のものを差出さねばなりません。》

N°4 (LXXXII) 《De la Royne de Navarre》はナヴァル妃讃, N°5 (LXXXIII) 《A François Daulphin de France》は皇太子へ巧みな自薦。N°6 (LXXXIV) 《タラール嬢に代りて王へ。Pour Mademoyselle de Talard au Roy》は、王の不興を解くべく傷心の女官を代弁した。

次がこのN°7 (LXXXV) Estreines à Anne である。

Estreine (Etrenne) は年頭献辞, 進呈品に沿え, 又詩自体も贈物と成った, 年賀に当るのだろう, Marot の作例はエピグラム一集に5個, 二集に4個, 特に詩法 Versification に拘泥なく相手各々に薔薇や小犬や希望などを送呈している。

しかし1541年2月, J. Dupres から公刊の宮廷の Dames 宛 Estrennes, 41個はすべて脚韻配列 AABBA, 1, 3, 4 詩句が 7 syllabes, 2, 5 句が 3 syllabes の五行詩に統一されており Marot にはこの詩型創始, 定着の意欲もあったかに思われる。

さて, この Estreine は, Anne 宛だから, 受取る人は Anne d'Alençon で良さそうなものだが Defaux 氏は Épitre XXII の新たな女性を推したがっている。この詩は1538年7月の Dolet 版に初出だから, 初句の《新年》は1537年か1538年の筈; 1526年から恋歌の宛先である Anne がこの年, 再び詩人に, 第2句《新しい痛手 une nouvelle playe》を与えるだろうか? と云うのがその論旨。長年に亘る諸家の Alençon 鼻眞に, 先年(1933)素晴らしい Marot 全集の校訂本を編んだこの碩学は少々癩癩を起しておられるのかも知れない。彼は1537年, 以後の Marot の恋人は Anne ではないと確信し《すると我々はここで同姓同名, 別人の Anne d'Alençon に対面しているのか?》と不興気である。

しかし Anne 特定化の至難, 重要別にして Anne は image であり idea であり又, 実在の Anne d'Alençon なのである。

それで, とにかく詩人は, 何人か不明の Anne にハートを進呈した。それもキリスト教, 教理にのっとって幸を得るべく, 自己最上のものを主なる神, 即ち Anne に差し出したのである。

この愛神の飛廻る世界に伝統の御宗旨が入り混じって来る。この詩は内容的に次に置かれた《聖愛》につながるものであろう。



LXXXVI

*De l'Amour chaste*

Amoureux suis & Venus estonnée  
De mon amour là où son feu deffault,  
Car Madame est à l'honneur tant donnée,  
Tant est bien chaste & conditionnée,  
Et tant cherchant le bien qui point ne fault,  
Que de l'aymer aultrement qu'il ne fault  
Seroit ung cas par trop dur & amer.  
Elle est (pourtant) bien belle, & si le vault ;  
Mais quand je sens son cueur si chaste & hault,  
Je l'ayme tant que je ne l'ose aymer.

聖愛

《私は恋に落ち、ヴィナスは彼女の恋の炎さえ  
怯む程の、吾恋に呆れている。  
何故なら吾 Madame は、貞節特に優れ、  
清らかさ限りなく、品位に溢れている  
そこで欠如のない善を求めて  
さはあるべくもなく彼女を愛するなら  
余りにも厳しい事例とは相成ろう  
しかし彼女は非常に美しく、そのケースに価する  
かくも清く気高い彼女の心を感じる時、  
敢えて恋せざるに及ぶ程、彼女を慕う。》

次に並ぶ N°9 から N°27 迄は、宛先なり状況 Anne に該当しない。N°28, Mayer の CVI が次の Cupide と Vénus の一場面である。

CVI

*De Cupido & de sa dame*<sup>1</sup>

Amour trouva celle qui m'est amere,  
Et je estois ; j'en sçay bien mieulx le compte.  
Bon jour (dit il) bon jour, Venus, ma mere.  
Puis, tout acoup, il voit qu'il se mescompte,  
Dont la couleur au Visage luy monte  
D'avoir failly, honteux, Dieu sçait combien.  
Non, non, Amour (ce dis je) n'ayez honte,  
Plus cler voyans que vous s'y trompent bien.

キューピッドと想われ人について

《キュピッドが私には切ない方に会った時  
丁度、私は其処に居て彼の言葉が良く聞えた。  
《ボンジュール、ボンジュール、ヴィーナス、お母さん》  
それから急に人違いに気が付いて頬を染める。  
神様は何とも恥かしかったのです。  
《否々アムール（と私は云いました。）恥かしがるな、  
あなたよりずっと慧眼の人も良く間違える。》

G. Defaux はこれも Diane 宛の詩と云う。成程、Diane と Vénus 取違えるに遜色はない。それに勝手次第の弓を引くキュピッドは余り眼は良くなかったらしいし、職業柄、目隠して飛ぶのも好きであった。彼は盲目の恋、思いもかけず落込む恋を司どる。

詩表題は1538年3月のシャンティイ写本 ms. de Chantilly で《愛神と彼のゲーム、  
Damour et de sa dame》、同年7月のドレ版 éd Dolet では《キュピッドとアンヌ、  
De Cupide et de Anne》。Defaux は Dolet の改変怪しからぬ、と云うのだが画面の明るさ、  
良く効いた *pointe* も凡そ冷厳な Artémis, Diane を思わせぬ。

(以下、紙数上 Anne 詩以外のエピグラムについて言及割愛。)

CXV

A Anne<sup>1</sup>

Anne, ma Sœur, d'où me vient le songer  
Qui toute nuict par devers vous me maine ?  
Quel nouvel Hoste est venu se longer  
Dedans mon cueur, & tousjours s'y pourmayne ?  
Certes, je croy (& ma foy n'est point vaine)  
Que c'est ung Dieu; me vient il consoler ?  
Ha, c'est Amour! je le sens bien voller.  
Anne, ma sœur, vous l'avez faict mon Hoste,  
Et le sera (me deust il affoller)  
Si celle là qui l'y mist ne l'en oste.

吾妹子アンナ他

《アンヌ、吾妹子、毎夜私をあなたの所へ  
連れて行く夢は何処から来るのでしょうか？  
新奇の客の何人が私の心に住みついて、  
そこを歩き廻っているのでしょうか？  
(根拠なしではありません。) ああ、これは愛神です。私は彼が飛び廻るのを感じます。  
アンヌ、吾妹子、あなたが彼を私の客としたのです。  
彼は今後も居座ることでしょう  
私を恋で狂わせてしまうでしょう  
彼をそこへ置いた方が

彼をそこから取除いて下さらないなら。》

Epig. 37. CXV は恋愛詩常套の夢の歌、C. A. Mayer はシャンティイ写本のこの詩の titre が《Sur Anna Soror et cetera》だから、いずれラテン詩の翻訳と思うが原典不詳とのみ註記している。G. Defaux の方はこれにエネイード巻の4、Chant IV de Enéideで、英雄 Enée を慕うカルタゴ女王 Dido とその妹 Anna Soror を当嵌めた。妹は《自分の心に忠実なれ》と姉を励ます。従って Virgile を敷衍しの Marot 詩第3句の《新客 nouvel Hoste》は新しき年に詩人が出合った《Laure invincible》多分は Dyane であり、第8句《妹, Anne よ, あなたが愛神 Amour を私の客とした。》は Anne ma sœur 即ち Anna Soror が詩人の心に別の女性を導入したと云う意味になる。

これは一寸信じ難い解釈である。何故 Anne が Dyane を詩人に推挙するだろう、そして詩人の胸に住みついた Dyane への想いを、Anne が、そこへそれを置いた方が、取除き得る、とは訣が解らぬ。この新解釈はラテン詩への拘泥が過ぎるだろう。Anna Soror 即ち Anne ma sœur は Virgile を写さずとも、巻頭から現れている。詩は Anne への恋以外を語っていない。沢山の Anne 詩の一つ。

## CXXII

D' Anne<sup>1</sup>

Lors que je voy en ordre la Brunette  
Jeune, en bon point, de la Ligne des Dieux,  
Et, que sa Voix, ses Doigtz et l'Espinette  
Meinent ung bruit doulx & melodieux,  
J'ay du plaisir & d'Oreilles & d'Yeux  
Plus que les Sainctz en leur gloire immortelle,  
Et aultant qu'eulx je deviens Glorieux  
Des que je pense estre ung peu aymé d'elle.

アンヌへ

《着付も床し、ブリュネット  
神の家系に恵まれて、若く健やか  
その声は、指はピアノは  
甘やかな旋律も豊かな音を奏で  
目も耳も喜びぬ  
不滅の栄の聖者達、これに勝るか  
劣らずか、吾は誇るなり  
僅かなりともこのひとに愛されてあり。》

Anne は詩人の為にエピネットを弾いて呉れたのだろうか？ 左様に読めるし又、この詩の直ぐ前に置かれた Epig. CXXI 《王のリュート奏者アルベールについて D' Albert Joueur de Luc du Roy》は、この宮廷音楽師の凄腕を称えているから、これも関連して

或る演奏会の一齣かも知れぬ。

ブリュネット Brunette はソロモンの雅歌《Cantique des Cantiques》の一章2節《私は黒いけれど美しい, la nigra sed formosa》迄, さかのぼるそうだ。中世では黄金の髪のイズーラブロンド Iseault la Blonde に代表される金髪礼讃が圧倒的と云うより全的であった。色彩の Symbole も中世的だがルネサンスもこれを引き継ぎ Marot も度々これを利用して。黒は貞節 fermeté, 白は純潔 pureté, 天使にまがう金髪に対し Marot や Ronsard は何やら現実的な個性, 個体を連想させる褐色髪を好んだ。

Marot の二つの chanson XXXVI, XXXVII がこの対決を唄っているし chanson 中のブリュネットは épig. CXXII と同じく Anne の Cycle に属するものであろう。

XLV

Chanson XXXVI

Pour la Brune

Pourtant, si je suis Brunette,<sup>1</sup>  
Amy, n'en prenez esmoy,  
Aultant suis ferme & jeunette  
Qu'une plus blanche que moy ;  
Le Blanc effacer je voy,  
Couleur Noire est tousjours une ;  
J'ayme mieulx donc estre Brune  
Avecques ma fermeté,  
Que Blanche comme la Lune  
Tenant de legiereté.

褐色髪の子に代りて  
《私がブリュネットだとしても,  
アミよ (恋人よ) 心配しないでね  
私よりブロンドの女より  
同じ貞潔, 若いのです。

黒色は常に変らぬ,  
貞潔な褐色がずっと好き,  
月みたいに移気な  
金髪よりも。

CXXIX

A Anne<sup>1</sup>

Puis qu'il vous plaist entendre ma pensée,  
Vous la sçaurez, gentil Cueur gracieux,  
Mais je vous pry, ne soiez offensée

Si en pensant suis trop audacieux.  
Je pense en vous & au fallacieux  
Enfant Amour qui par trop sottement  
A fait mon Cueur aymer si haultement ;  
Si haultement (helas) que de ma peine  
N'ose esperer ung brin d'allegement,  
Quelcque douceur de quoy vous soyez pleine.

アンヌへ

《私の気持をお聞きになりたい由

それをお報せ致しましょう、優しく雅びな方よ。

どうぞお願いですから、私が余り大胆だなぞお考えになって、御不快召しませぬよう。

私はあなたを想い、又愚かしくも我心に

いと高きを愛さしめる、あのまことしやかの子供の愛神を思う。

ああ、余りに高く、我苦しみ軽減の萌芽さえ

希むべくもありません。

如何に、あなたが優しさに溢れておられるとは申せ。》

Epig. CXXIX

第7詩句《いと高きを恋わしむる愛神 (Amour qui) A fait mon Cueur aymer Si haultement》は重要な書簡詩 épître XXII, 第30詩行の《高き家系の御姿, ung Corps né de hault parentaige》に合致する。出典から、内容からいずれも1537~38年間の作品、とすると詩の宛先も同じであろう。

それなら Anne d'Alençon と Guiffrey。高貴の Dyane と Defaux。ここでその詮索は追い切れぬ。

只, Dyane invincible に並んで Anne d'Alençon も Epig. CXXI, 第2行が云うように《神の家系 La ligne de Dieux》なのだ。そして Epig. CXXI, CXXIV の敬意を込めた優しい pointes 《僅かなりともこの方に》, 《あなたが如何に優しさに》も同じ思惟, 感情の表明に他ならぬ。

CXXXII

A Anne du jour de Sainte

Anne<sup>1</sup>

Puis que vous portez le nom d'Anne,  
Il ne fault point faire la beste.  
Des aujourd'hui je vous condanne  
A solenniser vostre Feste,  
Ou aultrement tenez vous preste  
De veoir vostre nom à neant.  
Aussi pour vous trop doux il sonne ;

Veü la rigueur de la personne,  
Ung dur nom vous est mieulx seant.

聖アンヌの日のアンヌへ

《あなたはアンヌの名をお持ちなのですから  
知らぬ顔をなさっては不可ません  
今日の御自分の祝日を厳そかに  
祝わねばなりません。  
さもないと早晩、お名前が無くなる破目になりますぞ。  
何しろこの名前、あなたには似つかぬ優しいひびきなのだから  
お人柄のつれなさ思えば、  
きつい名前がずっと良くお似合いなのですからね。》

Sainte Anne は聖書外典、聖母 Maria の母親である。マリア崇拜は2世紀頃から拡  
まって、一族の物語も書き継がれたそうだから、この Jésus の祖母は神より200才は年下  
の羊皮紙の夢だろう。祝日も現代の7月と合致するやら不明である。

とにかく聖女と同名の恋人 Anne に Marot らしい冗談 badinerie が飛んでいる。更  
に Guiffrey 註記は Anne と âne (驢馬) の同音異義 équivoque から第2詩句《知らぬ  
ふり、即ち莫痴をする。faire la bête (獣)》にも詩人の遊びの意図が絡む、とある。少々  
穿ち過ぎの解釈か？ いずれ高貴の恋人は余り喜びそうにないが余裕たっぷりの詠み口で  
ある。《Anne の日の Anne》が表題だから各宛先は D'Alençon と限定は出来なくても、  
《Anne》であって、Defaux 氏主張の《Anne と云う Diane》は通用しない。

CXXXVI

*Il salue Anne*<sup>1</sup>

Dieu te gard, douce, amyable Calandre  
Dont le Chant faict joyeux les ennuyez.  
Ton dur Depart me fait Larmes espandre ;  
Ton doux Reveoir m'a les yeux essuyez.  
Dieu gard le Cueur sus qui sont appuyez  
Tous mes desirs. Dieu gard l'Œil tant adextre  
Là où Amour a ses Traictz estuyez ;  
Dieu gard sans qui gardé je ne puis estre !

アンヌへ挨拶

《神があなたを守ってくださいますように、優しく可愛い雲雀さん  
その唄は哀しみも朗らかにしてしまう。  
あなたの辛い旅立ちは私を涙に暮れさせた、  
あなたの優しいお帰りは私に涙を拭わせた、  
神よ、我希みすべてを托するあのハートを守り給え

神よ、あの良く動く眸を守り給え  
そこに<sup>アムール</sup>愛神が矢を隠している、  
神よ、守り給え、神なしには私に防ぐ術なし。》

Calandre は褐色の大型雲雀 *grosse alouette brunaitre* だから《褐色髪の娘・La Brunette》Anne d'Alençon が直ちに連想される。

他に Anne に関する羈旅の歌がかなりある。Epig. 23, 31, 72, 136, 209；これは古来絶好の詩主題と云っても、最初の Epig. 23, 行先も知らせぬ、恋人の旅立ちの悲しみは詩人の心に尾を引いたに違いない。詩人にとって彼女との別離と再会は太陽の出没 Epig. 31, 209 にも等しいのであった。

今また Calandre が宮廷へ戻って来た。今度は煌めく眸から放たれるキューピッドの矢を防がねばならぬ。宮廷詩人も忙しいがペトルルキスムは存分に使いこなしている。

CXL

*De Anne*<sup>2</sup>

Jamais je ne confesserois  
Qu'amour d'Anne ne m'a sceu poindre.  
Je l'ayme ; mais trop l'aymerois  
Quand son Cueur au mien voudroit joindre.  
Si mon mal quiers, m'amour n'est moindre,  
Ne moins prisé le Dieu qui volle.  
Si je suis fol, Amour m'affolle,  
Et voudrois, tant j'ay d'amytié.  
Qu'aultant que moy elle fust folle  
Pour estre plus fol la moytié.

アンヌについて

《アンヌへの愛が私を突刺したなぞ云わなかった、私は彼女を愛している；  
しかし彼女のハートが私のハートに結びつきたがるなら、随分、彼女を愛するでし  
ょうに、  
私が不幸を求めているにしても、我愛は少なくともならないし、  
空飛ぶ神の<sup>アムール</sup>愛神を侮どるでもない、  
狂っているとすれば、アムールが私を狂わせているのだ。  
こんなに想っているのだもの、  
私と同じ程、彼女も恋に狂って欲しい  
より狂っている者に半分の肩代り。》

Epig. CXL

何度も愛神 Amour が登場するが全体から見ると Marot 詩中のギリシャ、ローマ神達は未だ原型的で存外、数も少ない。自ら *Métamorphoses* 翻訳を手掛ける時代、この方面

に於ける Pléiade の多彩求むべくもなかった。

G. Defaux はこの詩を含めて、この前に置かれたノルマンディの夫人, une Dame de Normandie との応接 3 詩を Anne d'Alençon が相手ではないか、と云っている。Alençon 公国はノルマンディに在り、Marot の父 Jean もノルマンディの出身である。Marot とノルマンディの関係浅からずと云えよう。しかしここに全詩をひく余裕がないのだが Epig. CXXXVIII の恋詩に答えてノルマンディ夫人の返歌、《心配に負ける位のほんの僅かの恋心では、あんなにお希みの愛の幸なぞ手に入りません。Le peu d'amour qui donne lieu à Craincte/Perdre vous faicte le tant désiré bien ;》は、《誘う水あらば》の小町流であって到底 Anne とは思われぬ。

この詩の洒落れた pointe は今や先端を切るイタリア流儀であろう。

CXLVII

*Du Moys de May & de Anne*

Moys amoureux, Moys vestu de verdure  
 Moys qui tant bien les cueurs fais esjouir,  
 Comment pourras (veu l'ennuy que j'endure)  
 Faire le mien de liesse jouyr ?  
 Ne Prez, ne Champs, ne Rossignolz ouir  
 N'y out pouvoir ; quoy donc ? je te diray  
 Tant seulement faiz Anne resjouyr ;  
 Incontinent je me resjouiray.

5 月とアンヌについて

《恋の季節、緑まとった〔5〕月  
 かく心地良く、人々を楽しませ〔5〕月よ。  
 わが堪え忍ぶ哀しみや鑑みて  
 この心、楽しめます方法ありや？  
 牧も、野も、鶯聞くも効果なし；  
 されば如何にか？ 云わまほし  
 只、アンヌにぞ楽しみを、  
 忽ちに吾はも嬉し。

Epig. CXLVII は春の唄、皐月の歌。5 月は植樹祭に始まり花開き初める月、随分古くからフランスの野を楽しめる chanson が駆け廻っていたようである。Guiffrey が Marot 詩に関連して 5, 6 個、古謡を引いて呉れている。その一つ。

Vecy la douce nuyt de may  
 Que l'on fe doibt aller iouer  
 Et point ne fe doibt on coucher ;  
 La nuyt bien courte trouveray.



Devers ma Dame m'en iray :  
Se fera pour la faluer  
Et pour congie luy demander,  
Si ie luy porteray le May.  
Le May que ie luy porteray  
Ne fera point vng efglantier,  
Mais fe fera mon cueur entier  
Que par amour luy donneray.

(B. N., ms. fr. r2744, fol. XXVI.)

《さても楽しき5月の夜  
皆、楽しみに出向く筈、  
寝ている筈がないだろう  
夜を短夜と思うなり  
Madame の所へ行きましょう  
彼女にお許し貰う為、  
5月の枝を持って行く  
これ薔薇の一枝にあらず  
彼女に与う我心のすべて。》

Clément の《5月の歌 Chant de May》は既に1532年の《クレマンの青春賦》初版中に2篇, Epig. 8 と12があり, これらは ms. n°1717 de la B. N. により, 1527年作詩の日付決定可能である。

このうち Epig. 8 《5月の10行詩 Le Dizain de May》は1538年の Dolet 版及び Gryphius 版に Anne が出現し, 《5月と Anne, Du Moys de May et de Anne》即ちここに挙げた Epig. 147 の8行詩と同一表題に変わる。

Epig. 147 の方は1538年 Dolet 版の Les Œuvres に初出であるからこの2つの同一表題詩の間には10年間の開きがある。

G. Defaux の指摘によればこの8行詩も ms. n°748 de Chantilly の表題は単に《Du moys de may》, それに第7詩句の Anne も無く《只, マダムにぞ楽しみを, Fais seulement madame resjouir》とある。

昔日の Chant de may Epig. 8 にも Anne は無く, 恋人 madame の美性が, 擬人化された5月の神と比較されているのであった。

要するに Anne は詩面に浮沈し, 筆生の気紛れか, 詩人は《恋人の名は云わぬ》(Rondeau XXXVII) 約束を守り抜いているのか, 不慮な版元 Dolet の介入か, 云うを得ぬ。例によってここには, はや藤長けた近代の春愁迄思わせる手練の歌が残っているばかりだ。

5月の歌は他に Ballade 詩型の作品が2個, Ballade XVIII 《Chant de May》, Ballade XIX 《Chant de May et de Vertu》が御覧の通りエピグラムと同一表題で1538年のドレ版, マロ作品集, 雑詠 Les Chants divers の項に並んでいる。中世を風靡した Ballade

について Sebillet の詩法を要約すればこれは 3 詩節 coupletz, 1 返歌 envoi に成立つ。定型詩で各 couplet の詩句数に限定はないが、エピグラムに準じ、各節一定、同一脚、envoi は couplet の約半数詩行で、冒頭句は屢々歌会の座主であった王侯或いは姫宮 Prince ou Princesse の呼掛けで始めねばならぬ。第 1 couplet 終行が refrain で envoi も含めて各節終行に、即ち 4 回の繰返し句と成る。Ballade の内容も、王侯への呼掛け、又荘重な詩型にふさわしい重要な素材 matieres graves が選ばれた。先述 Marot の 2 つの Ballade も春を歌いながらかなり教化的であってエピグラムの軽妙には程遠い。しかし《我愛、常時変らず、Mes amours durent en tout temps》を折返し句とする Ballade XIX は Anne に関連の可能性がある。更にこれは 5 月の歌ではないが、1533 年刊の《続クレマンの青春賦》中に初出の Ballade XIII 《新しき恋の従僕によるゲームとその美についてのバラード。Ballade d'une dame et de sa beauté par le nouveau serviteur》の折返し句、《これ真にフランス第一の美女、C'est bien la plus belle de France》は Rondeau XXXVII 《パリ中に先ずこれ程の美女はなし、Qu'il n'en est gueres de plus belle Dedans Paris》(vers 8) にも共通し Anne d'Alençon が対象と考えられている。

Sebillet は《変質する時代と共に、これ (ballade) に道化も採用されるが余り似合しいものではない。》と述べている。Sebillet の仏詩法 ballade の項の引例は Marot の ballade VII 《皇太子殿下御出生、De la naissance de Monseigneur le Dauphin》で彼はこれなら本格の、ballade と考えた訣だ。又《より軽く諧謔性のある素材、matieres plus légères et facécieuses への転用》の云い方には、我詩人の、剽軽ながら痛烈な、脂肉食の N° XIV、先述した仏随一の美女に有頂天の N° XVII への配慮がある。騎士達の甲冑のような、嚴重な規則や refrains に縛られたこの詩型の鉄籠の間からもルネサンスの緑萌え初めているのである。ついでながらフランス最初の Sonnets と目される Clément の sonnet n° III も Lyon 長官 Trivulse 殿邸宅前の植樹祭を祝った 5 月の歌である事もつけ加えておきましょう。

CXLVIII

*De son Feu et de celluy qui se  
print au Bosquet de Ferrare<sup>1</sup>*

Puis qu'au milieu de l'Eau d'un puissant fleuve  
Le vert Bosquet<sup>2</sup> par Feu est consumé,  
Pourquoy mon Cueur en Cendre ne se treuve  
Au Feu sans eau que tu m'as alumé ?  
Le Cueur est sec, le Feu bien enflammé ;  
Mais la rigueur (Anne) dont tu es pleine  
Le veoir souffrir a tousjours mieulx aymé  
Que par la Mort mettre fin à sa peine.<sup>3</sup>

フェルラーラの森火災と忘魂児  
《あの激しい河水の真中で

緑の森が焼失したのだから  
 水の助けぬ〔情〕火に焦げて  
 この心何故灰とは化さぬ？  
 心は乾き、火は燃え盛る、  
 しかしアンヌよ、あなたのひどいつれなさは  
 死に果てて、悩み終わるを眺むより  
 何時迄も悶える人を見るが好き。》

この小さい森はフェルラーラのポ Pô 河中の小島に在り公妃 Renée 側近の仏人達の憩いの場所であった。Epig. CXLV 《A Madame de Pons》と Epig. CXLVI 《A Renée de Partenay》がこの緑森の楽しさを伝えている。森は新しい緑の衣を身につけて《Et (le Bosquet) a vestu sa verte Robe neufue》M<sup>me</sup> de Pons を歓迎するし、Renée de Partenay は小鳥さざめくこの森《En ce Bosquet qu' Oyseaux font resonner》で Marot に詩を求めた。勿論、櫃中最良の品を持たせましょう、しかし、どなたからでもお取りになれるものを、私が差上げる必要なぞございますやら？ 《Mais quel besoing est-il que je vous offre/ Ce que gagner d'un chascun vous sçavez ?》がその返答。

さて Epig. CXLIII. この森の焼失にかけて詩人は恋情の消えざるを歎いている。又、Anne が問題になる。M<sup>me</sup> de Pons が Anne, 次の詩の Renée と共に M<sup>me</sup> de Subise の娘達である。M<sup>me</sup> de Subise は死床の王妃 Anne de Bretagne が信頼込めて、愛娘 Renée de France を託した女性であり、今や公妃となった Renée を補佐して共にフェルラーラに在った。

この女性は Marot の父 Jean を Anne de Bretagne に推挙して呉れた人でもある。

かつて Renée 公妃に祝婚歌を送った実績と、この Subise 夫人を頼り、それでも心もとな気に《旅行中にて一寸と立寄り》は亡命の Marot の云い草。公妃はお見通しの筈であろう。義兄 François 1<sup>er</sup> は伊侵略の拠点へ彼女を送り込んだのであり、Este 公の方はローマ寄りを得策と考え、はざまの Renée は苦しんでいた。御宗旨がこれに絡まる。Renée は Sorbonne に追われる亡命仏人を平気で匿っていた。これを語れば Anne 問題からは少し外れ過ぎよう。只 Epistre XL, XLI は表面化こそしないが、スパイ容疑でやがてフランスへ送還される Subise と Partenay を泣く、Renée 側の姿勢、感情を良く伝えている。

さて、この Anne は誰か？ 以上の状況で、目下寛大に迎えられ、秘書役に任じられて、まさか恩人の娘のそれも既婚の Anne de Pons に恋の炎はないだろう。C. A. Mayer は《Anne d'Alençon はフェルラーラに居ないし、Pons 夫人がこの詩の対象ではあり得ず》とだけ註記している。

Guiffrey は Anne de la Fontaine を想定したが Mayer 調べでこの女性は François 1<sup>er</sup> の再婚の、カール5世 Charles Quint の姉 Eleonore 妃付きの女官として1531—1532年、この任務にある。

この時点でフェルラーラ宮廷在で Marot 献詩の相手とは考え難い。

それより Guiffrey は既に、第6行詩句の Anne が1538版 (éd de Denis Janot) 以後にしか出現しない事を指摘した。Anne の名は後に追加されたものである。Marot の épi-

gramme はあらゆる女性に充当する。何処でも通用《passe-partout》の声明だ…… G. Defaux も追い打って、この詩、初出のシャンティ写本、ms de Chantilly で第6行詩句の《Anne》は単に、《ああ hélas》である。《これは当初この詩を Anne へ与える予定は無かったのだ。》と述べている。

しかし Marot はフェルラーラにあって遠く Anne を想っても良かったろう。又音綴さえ合うなら、如何んな名前もここに入れるがよろしかろう。当方では水と火の concetti, 更に良く効いた pointe にペトラルキスムも指摘すれば良らしい。

CLI

A Anne<sup>1</sup>

Puis que les Vers que pour toy je compose  
T'ont fait tancer, Anne, ma Sœur,<sup>2</sup> m'Amie,  
C'est bien raison que ma Main se repose.  
Ce que je fais ; ma Plume est endormie ;  
Ancre, Papier, la Main pasle et blesmye  
Reposent tous par ton commandement ;  
Mais mon Esprit reposer ne peult mye,  
Tant tu me l'as travaillé grandement.  
Pardonne doncq à mes Vers le tourment  
Qu'ilz t'ont donné, et (ainsi que je pense)  
Ilz te feront vivre eternellement ;  
Demandes tu plus belle recompense ?

アンヌへ

《あなたの為に創った詩句のお蔭で  
あなたは叱られたのだから、アンヌ、吾妹子、吾ひとよ  
これぞ吾手を休める理由です  
こうしましょう、吾羽ペンは眠りませ  
インクも紙も、蒼白い手も、皆、  
御意向に沿って休みます。  
しかし吾胸は休み得ません  
あなたは何と、随分これを苦しめた。  
ですから詩句が与えた御不快の程はお許し下さい  
(そして思うに、)  
あの詩句共はあなたを永遠に生かしめる。  
更に良い報いをお求めになりますか？》

エピグラム第2集を閉じるこの作は少なくも Anne 実在をはっきり伝えるものである。Anne が叱責される理由は Marot の恋詩であるから叱責の内容は未婚の女性が左様なものに余り拘わり合うな、なのだろう。叱られる位の女性ならかなり年齢が下るだろう。

Anne d'Alençon の生年月日が特定出来ないようだ。1527年頃、詩人に雪を投げた朗らかな少女が D'Alençon なら当時の彼女を14, 15才に想定すれば計算は合う、とにかく推定ばかりでは詮も無い。

Marot の攔筆は事実であった。彼はもう Anne の名を書かない。否もう一つ、捨ぜりふめく Etrrenne.

それはさてこの詩の約束の方も事実と成った。Anne が何人であれ、この名はエピグラム集と共に不滅である。

エピグラム 1, 2 集中に姿を見せないが、このあと 3 個の Epig. CCVIII, CCIX, CCLXVI が Anne の名を止めている。Epig. CCVIII の Huictain は先稿 Anne d'Alençon の identité の決め手となった詩でここに再述しない。これと共に、次の Epig. CCIX 《A Anne》が詩人歿後 3 年を経た 1547 年の éd. Marnef に初出である。この詩は Epig. XXXI 《A Anne》と全く同工異曲、前者は 1533 年以前の作、こちらは 1538 から 40 年の間に位置する。後者に老朽の度が増した分、感情の激しさ vivacité は減じている。若年期から名工の詩人も齢重ねて行く。

CCIX

*A Anne*

Le cler Soleil par sa presence efface  
Et faict fuyr les tenebreuses nuitz  
Ainsi pour moy (Anne), devant ta face,  
S'en vont fuyant mes langoureux ennuictz.  
Quant ne te voy, tout ennuyé je suis ;  
Quant je te voy, je suis bien d'autre sorte.  
Dont vient cela ? savoir je ne le puis,  
Si n'est d'amour, Anne, que je te porte.

アンヌへ

《明るい陽があらわれ  
暗い夜を消し、追い払うよう  
アンヌよ、あなたの前に居ると  
わが遣る瀬なも散りちりだ  
君居まさねば、この愁ひ  
君あらば、又別なる苦痛  
何処よりこれ来たるやは知るを得ず  
アンヌよ、君に抱く恋故にあらずば。》

\*CCLXVI

*A Anne*<sup>1</sup>

L'heur ou malheur de vostre cognoissance

Est si douteux en mon entendement  
Que je ne sçay s'il est en la puissance  
De mon esprit en faire jugement ;  
Car si c'est heur, je sçay certainement  
Qu'un bien est mal quand il n'est point durable ;  
Si c'est malheur, ce m'est contentement  
De l'endurer pour chose si louable.

アンヌへ

《あなたと知り合って仕合せなのか、  
不幸なのかとんと怪しい。  
判定、力及ばずの感、  
仕合せとなら、これ続かざれば  
幸も不幸と良く解る  
不幸となら  
それを耐えるが吾満足  
かく称うべき事の為。》

Epig. CCLXVI は1550年の éd. Groulleau 中にあり、1574年の éd. A de Harsy, Mellin de Saint Gelais 作品中にもある。作真贋の決定不能であるが、より技巧に頼む作風、メランのものであり得る。

CLXXIV

Etrenne XLI

*A ma Dame de Bernay,  
dicte Saint Pol<sup>1</sup>*

Vostre mary a fortune

Opportune ;  
Si de jour ne veult marcher,  
Il aura beau chevaucher  
Sur la brune.<sup>2</sup>

年頭献辞

《汝が背子の  
時宣かなひたる運の良さ  
昼間、徒歩旅厭やとなら  
夜に栗毛を  
駆れば良し。》

1541年2月 Marot は41個の Estrenes を宮廷の夫人方へ献呈した。各々貴夫人方の美

性、徳性を称えたものである。この最後の一詩だけがひどかった。新ベルネ夫人, Saint Pol は Anne d'Alençon, 父領に由来して彼女は宮中でサン・ポールと呼ばれていた。1540年12月, Nicolas de Bernay と結婚したばかりである。

Clément は胆汁を飲んだに違いなかった。

#### 主要参考文献

1. Les Oeuvres de Clément Marot de Cahors en Quercy, Valet de chambre du Roy, éd. Groges Guiffrey. Paris, Claye- Quantin- Schemit, 1875-1931, 5 vol.; réimpr. Genève, Slatkine Peprints. 1969.
2. Œuvres complètes de Clément Marot. Edition critique par Claude Albert Mayer. London, The Athlone Presse/Genève, Editions Slatkine, 1958-1980, 6 vol.
3. Œuvres poétique de Clément Marot. Edition critique par Gérard Defaux. Classique Garnier, 1990-1993, 2 vol.
4. Œuvres complètes de Clément Marot, par Abel Grenier. Paris, Garnier, s.d. 1919, 2 vol.
5. LEFRANC, Avel, Le roman d'amour de Clément Marot, in Grands écrivains français de la Renaissance. Paris, Chmpion. 1914; réimpr. 1969.
6. SÉBILLET Thomas, Art poétique français. Édition critique par FÉLIX GAIFFE. Paris, NIZET, 1988.
7. HENRY GUY, Histoire de la poésie Française au XVI<sup>e</sup> siècle tome 11 Clément Marot et son école. Paris, Champion. 1968.
8. Clément Marot. Jean-Luc Déjean. Fayard. 1990.
9. V. L. SAULNIER/ LES ÉLÉGIES DE CLÉMENT MAROT. Paris SEDES 1952.
10. Les chanson de Clément Marot par JEAN ROLLIN. Paris, Fischbacher 1951.
11. Pétrarque. Canzonière. Ed. de P. Blanc. Garnier (1988)
12. C. A. Mayer. Clément Marot. Nizet (1972)
13. C. A. Mayer. Bibliographie des éditions de Clément Marot publiées au XVI<sup>e</sup> siècle. Nizet. (1965)
14. C. A. Mayer. Clément Marot et autres études sur la littérature française de la renaissance. Champion. (1993)
15. Œuvre complètes de Clément Marot par Pierre Jannet chez E. Picard. vol. 4 MDCCLXVIII.
16. C. A. Mayer et D. Bentley-Clanch. Clément Marot, Poète pétrarquiste. B. H. R. t. XXVIII. Droz (1966)
17. Pierre Villey. Les grands écrivains du XVI<sup>e</sup> siècle Rabelais et Marot. (1967)
18. Virgile. L'Eneide par M. Rat. Flammarion (1965)
19. Maurice Scève. Delie. éd. par E. Parturier. Nizet. (1987)
20. Les Œuvres de Clément Marot de Cahors, valet de chambre du Roy. A LA HAYE. chez ADRIAN MOETJENS. (M. DCC.)